



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

夏休みが始まり、地域の夏祭りがにぎやかです。今年は各地でトリエンナーレの美術企画が目白押しの年でもあります。瀬戸内芸術祭、新潟妻有のトリエンナーレ、愛知トリエンナーレなど、ちょっと足を延ばして現代アートを楽しむ旅もおすすめです。近隣の美術館も、大人も子供も楽しめる夏休み企画美術展がにぎやかです。素敵な作品との出会いが皆様の夏の思い出の1ページになりますように。

新九郎8月の展覧会のご案内

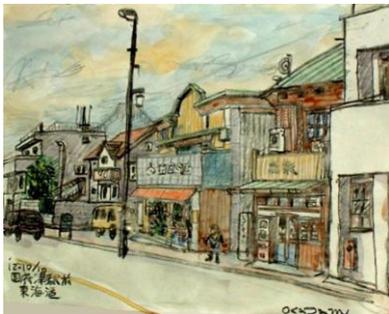
会期 展覧会名	見どころ
 8/7(水)~8/12(月) きのこアート20周年 記念展	枯れ木の中で育った「きのこ」の菌糸模様を使って、役20名の会員が作品を作っています。東京・福島支部の作品も。
 8/17(土) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費1500円 コスチューム、固定ポーズ
 8/25(日) ウクレレのタベ	長谷川マコトとスーパーウクレレバンド。フラダンスも入り楽しく賑やかに。1000円
 8/28(水)~9/2(月) 第12回フォトクラブ 画像館会員写真展	「わたしの好きな1枚」と題し、35名の会員が35点を展示します。

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	会場
8/15(木)~8/19(月) 第33回ハッスル会美術展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
8/7(水)~8/12(月) 第94回西ゆり会美術展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/21(水)~8/26(月) 第2回かんれいっ子展	飛鳥画廊 0465-24-2411
7/30(火)~8/11(日) すどう美術館セレクション展	すどう美術館 0465-36-0740
8/1(木)~8/12(月) 佐藤哲展	お堀端画廊 0465-23-7819
7/30(火)~8/4(日) 第8回湘南作家展	平塚市美術館市民アートギャラリー 0463-35-2111
7/19(金)~7/28(日) 小さなスケッチブック展 in 真鶴	真鶴情報センター1F 090-1431-4944 広瀬
8/10(土)~8/20(火) 一江戸の粹ー絵てぬぐい展	ギャラリーぜん 0463-83-4031

小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康
 第7回「相模国府の港」



「相模国府の港」の意の国府津駅。駅前突当りの右側、京都方面は、電線電柱が地下化されて「東海道」の昔の姿を再現している。生涯学習のスケッチ会の下見がてら、その「東海道」へ出てみる。車やバスはたくさん通るし街燈の柱は残っているが、電柱と電線のない青空は、本当にすっきりとして明るい。新しい建物の間に、昭和のデザインらしい靴屋や魚屋、鰻屋など、木造やモルタル塗りの家が並ぶ。右手に将棋駒の形の屋根が見えて来た。隣は木造瓦屋根の家。さらに隣には真っ白なコンクリートの建物が建つ。その対比が面白くて、スケッチした。屋根の上には富士山が望めた。今後も丁寧に保存されて欲しいと願うのは、地元の苦労を知らない余所者の、勝手な願いだろうか。

七回に亘る私の小田原の町並みスケッチを、ご覧並びにお読み頂き、どうも有難うございました。

思うことなど 横井山 泰



夏一番。教えている学校も夏休みに入った。「先生も宿題あるの?」「たくさんあるよ~」実際やることは山ほどあるのだ。

絵本の原画を描いているのだが、まさに山場で深夜のアトリエが常である。20年ぶりに再会した中学の友人との共作で、彼の原案に僕が絵を描く。当時、漫画雑誌(ちなみに僕は当時漫画をまともに読んだ事が無かったのだが)を作った仲である。また彼は話が上手で下らない事でも面白おかしく話した。僕は

下らない事でも面白い絵にできる気がして絵を描こうと決めた。そして「一緒に仕事をしよう」などと話していた。随分と時間が経ったけれども実現に向かっていて。お話は有名なお伽噺に登場する犬を主人公にしたもので「犬が悲しみを止め止め独りで旅立つ」という場面がある。おそらく犬は彼自身なのだろう。僕たちの町では目の前にいつも富士山があった。大きな町へ行く車窓からは、位置も表情もコロコロ変わっていく様が観えた。そんな景色も描いている。11月には完成する見込みです。

七月のこと

恒例となった、小田原銀座商店会主催「第十一回街なみ再発見展」が銀座通り五つの画廊を会場に開催された。昨年より制作エリアを小田原市、テーマを街なみ・建物とし、開催当初の原点に戻っての二年目である。

テーマがより鮮明になり、街の魅力が引き出されている。なりわい交流館・内野邸・松永記念館・江島等々今まで描かれたモチーフが重なってきているが、描く人や技法により違う魅力があり、それも楽しみである。おせんべい屋さん・とんかつ屋さん・旧家のカフェ等々、普段何気なく通り過ぎていた建物の良さに改めて気付くものもあった。また新しい風景でも、JR小田原駅改札上にある小田原提灯を描いた絵は、小田原を正面きって捉え、その視点の良さで観客をうならせた。

また、各画廊で会場当番のボランティアをお願いし、参加者の交流が図れたことも良かった。スケッチをしていて人達を写した写真作品から交流が生まれ、思わぬ知人の作品が出品されたり、様々な出会いも生まれている。また馴染みの場所が多いので、作品を前に懐かしげに長時間話し込む姿もあった。

技術の巧拙でなく、街なみ再発見というテーマで見ると、プロ・アマ問わず誰でも参加できる展覧会である。今後も回を重ね、小田原の魅力の再発見をしてほしい。銀座商店会では、出品作品の中から季節・小田原らしさを考慮して選定し、来年のカレンダーを作成する。十一月の発売が楽しみです。

「地方公立美術館・市民ギャラリー見学ツアー」を開催しました。

おだわらミュージアムプロジェクト（OMP）では、これからの美術館のカタチを探るため「地方公立美術館・市民ギャラリー見学ツアー」を企画実施しています。7月21日（日）第2回目として「横浜市民ギャラリーあざみ野」「アートラボはしもと」（相模原市）を見学しました。今回はOMP会員を含め10名の参加者がありました。

あざみ野は三ツ山一志館長、アートラボは加藤慶学芸員にご案内いただきました。

横浜市民ギャラリーあざみ野は平成17年開館。指定管理者公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営する。「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション」の保存活用事業とコンテンポラリーアートの紹介が二大柱である。企画では大手がやらない若手作家の紹介、美術館がやらないアニメーション作家の紹介等差別化に工夫を凝らす。学芸員は2名。

アートラボはしもとは企業から相模原市に、美術館建設を目的に土地・建物（マンションギャラリー）の寄付を受け2012年オープン。美術館建設までの暫定施設としての利用で、4名の学芸員がいるアートの活動拠点である。周辺には多摩美術大学、女子美術大学、東京造形大学、桜美林大学があり、これら4大学と市が協定を結び美術振興事業を推進している。



当日はワークショップ開催中だった。参加費無料、申し込み不要という誰にでも開かれた会場は、驚くほど多くの親子連れで賑わっていた。会場の中庭では裸足で筆や手を使ってガラスに絵を描く幼児、アトリエではお絵かきを楽しむ若い親子であふれていた。廊下にはベビーカーの行列、ロッカーにはリュックや靴が所狭しと置かれていたが、会場内は泣き声や悪ふざけもなくアートを楽しむ姿が自然で日常化しているように見えた。若いパパの姿が多いのも特徴的だ。毎年1万人を超える参加があるというアートイベントは、ゆったりとした時間の中で、表現することの楽しさを体験した子どもと、自立心と心身の健やかな成長を願う親の愛に支えられての人気講座なのだろう。館長の三ツ山一志さんは、「おだわら・コドモ・アート」の指導者でもある。小田原の子どもたちを育むアートイベントの理想がみえた、大変いい時間だった。

木下和子

「あざみ野市民ギャラリー」では、三ツ山館長自ら館内のバックヤードから隅々までご案内いただきました。ちょうど、子どもたちがガラス窓いっぱいに絵の具で絵を描くプログラムを実施していて、父親の参加も多く、大盛況の状況を押しました。「アートラボはしもと」は、モデルルームハウスを活用して、周辺にある3美大との連携を進めながら、規模は小さいながらも確実に企画実施をされていました。どちらも、館を運営する核になる方が自ら手を動かし、足で周りを動かし多くの制約ある中でもアイデア溢れる発想でユニークな取り組みをされていました。両館から感じたことは「『器』でなく『人材』」がもっとも重要であるということでした。

深野 彰

印象的だったのは搬入口や仕分け部屋、仕切りパネルの倉庫や備品庫が充分にあったことでした。ギャラリーは表のスペースと同じくらい、それらバックヤードが重要であることがよく分かりました。また 展覧会をすることを考えてのスタッフルームも使い手の事情を良く考えた設備で、これらは小田原でも実現できればと思いました。私は書作品を書く時に 見る人がどの距離で見るとかを想定して書きます。今、市内公募の書道展はいくら高さは取れると言っても観覧者が全体を見られるところまで離れられる距離をとって展示ができない現状です。照明も暗かったり、影ができたりと一様ではありません。今回案内して下さった三ツ山さんは「鑑賞が身近になることが大切、まず立ち止まって、全体が見えるまで十分にさがりよく見て、心が動くのを待つ。そして、心が何故動いたのか自分を見つめていく作業、それが鑑賞」とおっしゃっていました。東京に行かなくても私の街に芸術がある、そんな小田原にしたいと思います。

堤千恵子

市民はアートに何を求めるのか。「あざみ野市民ギャラリー」、「アートラボはしもと」を見学して改めて考えさせられた。両ギャラリーとも子どもを対象としたワークショップが運営の大きな柱となっており、若い親たち巻き込む活気溢れるスペースづくりは、アートの裾野を広げるという意味でも魅力的であった。しかし一方で、茅ヶ崎美術館が開いていた美術史講座のような、アカデミックなコンテンツは見当たらず、企画展も今ひとつ物足りないという印象もある。ギャラリー運営の要は熱意のある人材の確保に尽きると思うが、当然のことながら誰しも得意分野があり、多様なニーズに全て対応できる人はいない。限られたスタッフとスペースの中で何ができるのか。新たな市民ギャラリーを構想するには、なかなか悩みは尽きないだろうと思うのである。

野口誠之

三ツ山先生のお話を聞きながら、私はさだまさしがエッセイに書いていた、彼の恩師の言葉を思い出していた。～学校は勉強しに来る所ではない。勉強するための方法を教わりに来る所だ～。演劇、音楽に比べて、どうも私はアートの世界をつかめずにいた。しかし、先生のお話を聞きながら、自分の中の固くなっていったものが、アイスが溶ける様に少しずつ柔らかくなっていくのを感じた。「観えないものを探る」「体を止めて、心だけ動かす」「観ている自分を感じとる」先生はアートとつきあう方法、そしてその面白さを伝えて下さった。こういう方法を伝えてくれる人が、小田原には絶対必要だと思う。 大森 充

両施設は、市民参加や子供向けアートプログラムに特化した施設と言って良く、我々にしていただいた案内・解説は、優しく、丁寧で、意義深く、感銘を受けました。良質な情報が集まり、優れた人材が集うには、「場」が必要であると再認識しました。訪れた2市は、政令指定都市で、既に美術館を有していて、比較するには酷ですが、新しい文化創造施設が出来る予定とはいえ、小田原市は「周回遅れ」の感が否めません。モデルとすべき進んだ活動や機関を見聞し、文化施策の参考にして欲しいと考えます。

瀬戸克信

明るい自然光、子どもたちの足音と歓声、整頓されて並んだ靴と荷物、お父さんやお母さんの笑顔...休日の「子どものギャラリー」は、裸足の子どもたちがぎっしり。目を輝かせ、大きなガラスや豊富な画材をキャンパスにのびのびと楽しんでいました。小さな子どものワークショップはこうあってほしいという願いが目の前に現れた、夢のような風景です。

いつ伺っても新鮮でエッジの利いた企画展示をなさる横浜市民ギャラリー。広報媒体や展示パンフレットのデザインクオリティの高さはほれぼれするほどです。今回改めてよく見てみるとほぼ全ての媒体がデザイナーの記名入り。憧れのデザイナー名も多く見られ、計画と告知にどれだけの愛情がそそがれているかがよくわかります。目に触れる部分だけでなく、バックヤードの充実にも目を見張るものがありました。什器（展示品をつり下げる針金や照明等）の収納や搬入経路、スタッフのための控え室など、ソフト、ハード両面にわたって現場経験を重ねた方の知恵が行き届いていました。心を込めて運用されているのがわかり、学びたい、見習いたいと心から思いました。市民ギャラリーという名前の通り、近隣にお住まいの方々が年齢を問わず「楽しみに」足を運ぶ場所。アートへの揺るがない信頼と情熱を持つスタッフによる運営があればこそ、文化は常に新しく生まれ、育ち、積み重ねられて行くのだな、という思いを新たにしたい見学会でした。

(Studio PANDA 牛山恵子)

あざみ野では子ども向けのワークショップが開催されていて大盛況であった。真剣なまなざしで、ガラスの壁面に絵を描いている。かなり長い時間集中していて、描くことが本当に楽しそうだ。展示は若手のコンテンポラリーアートの紹介を一つの柱にしており、時代の要請に答えている。アートラボはワークショップを中心に、こども・美大生・市民・作家が学芸員とともに、手作業での館内修理や制作に参加している。両館ともアートの場を介して学芸員と作家・市民が交流し活発に活動している。小田原にもこのようなアートの場が望まれ、何よりも専門家（学芸員）の存在は必須である。

木下泰徳